

3. プレ企画・公開シンポジウムのご案内

日本台湾学会第21回学術大会 公開シンポジウム
台湾の多元文化と教育——原住民族の取り組みから

日時：2019年6月8日（土）15：50～18：00

場所：福岡大学 A棟 2階 A201（収容人数448名）

主催：日本台湾学会

助成：公益財団法人日本台湾交流協会

企画責任：宮岡真央子（福岡大学）、野林厚志（国立民族学博物館）

司会・趣旨説明：野林厚志

報告：比令亞布（ピリン・ヤプ、Pilin. Yapu）（台中市博屋瑪国民小学校校長）
王雅萍（国立政治大学民族学系主任）

討論：エドワード・ヴィッカーズ（Edward Vickers）（九州大学）、
横田祥子（滋賀県立大学）

使用言語：日本語、中国語（逐次通訳付き）

通訳者：石村明子、中恵麗

参加費無料・会員外の方も参加できます。

【趣旨説明】

台湾では1990年代半ばより、憲法で原住民族を先住民族として認め、国家による多元文化の肯定、原住民族の言語・文化の積極的な保護と発展を謳う。以来、学校教育や原住民族コミュニティで、文化継承の多様な取り組みが行われている。本シンポジウムでは、2名のゲストがその代表的事例を報告する。

比令亞布校長が率いる台中市博屋瑪国民小学校は、2016年度から台湾初の「原住民族実験教育」を開始した。村人を多数講師に招きタイヤルの言語・文化を幅広く教える独自カリキュラムを編成し、「学校カリキュラムのタイヤル化」も試みる。初等教育の場で民族文化を学ぶ場を創出した意義はたいへん大きい。

王雅萍主任は、国立政治大学と新北市烏来区の原住民族コミュニティとの協働で2014年以来、成人女性を組織し、タイヤル織布文化の探究・復興を進める。その一環でアイヌの人々との交流、各地の博物館資料調査も行ってきた。烏来の歴史と文化を辿る活動が、コミュニティの枠組みを大きく超えて行われている。

これらの事例報告に対し、比較教育学・文化人類学の視点からコメントする。これにより、文化の多元性がいっそう増している台湾において、教育の場で多元性をどのように認め、どのように取り込もうとしているのか、国民教育や国家統合とはどのようにバランスを取ろうとしているのか、そのあるべき形などについて、議論を行う。